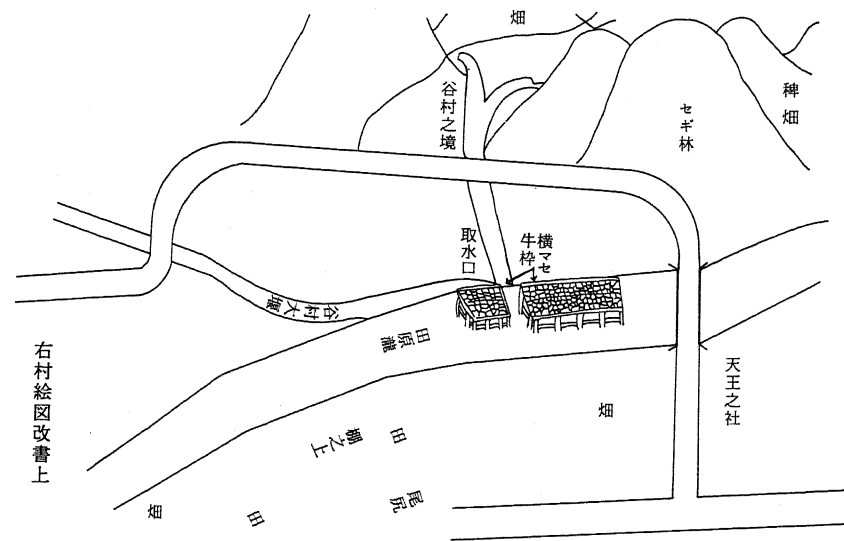
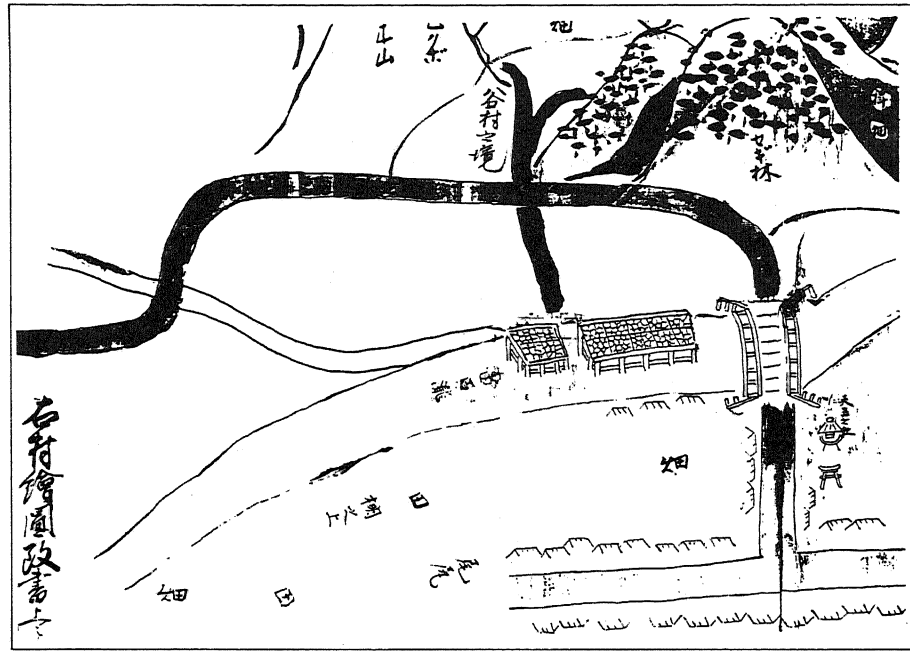


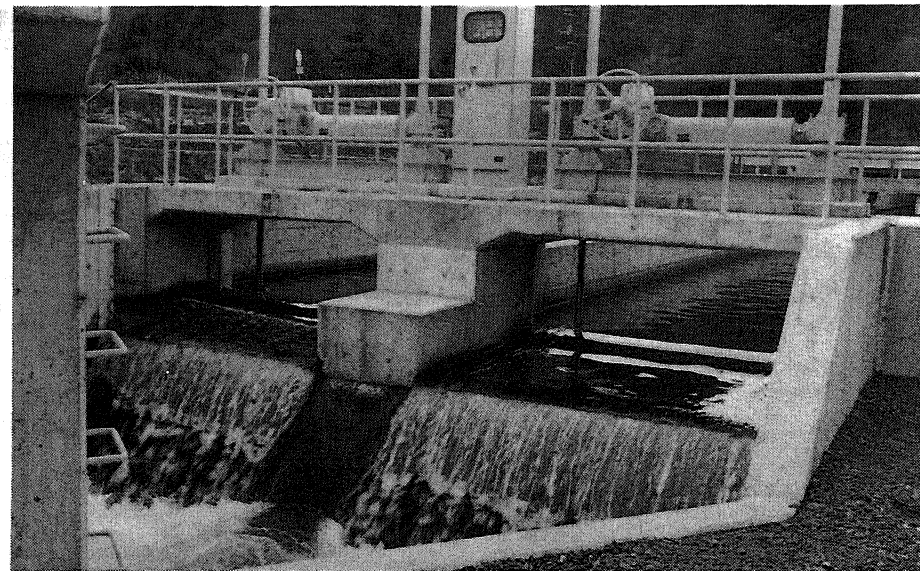
取入口絵図（文化元年、都留市蔵）



創刊十号記念誌  
都留市郷土研究会会報  
(十)

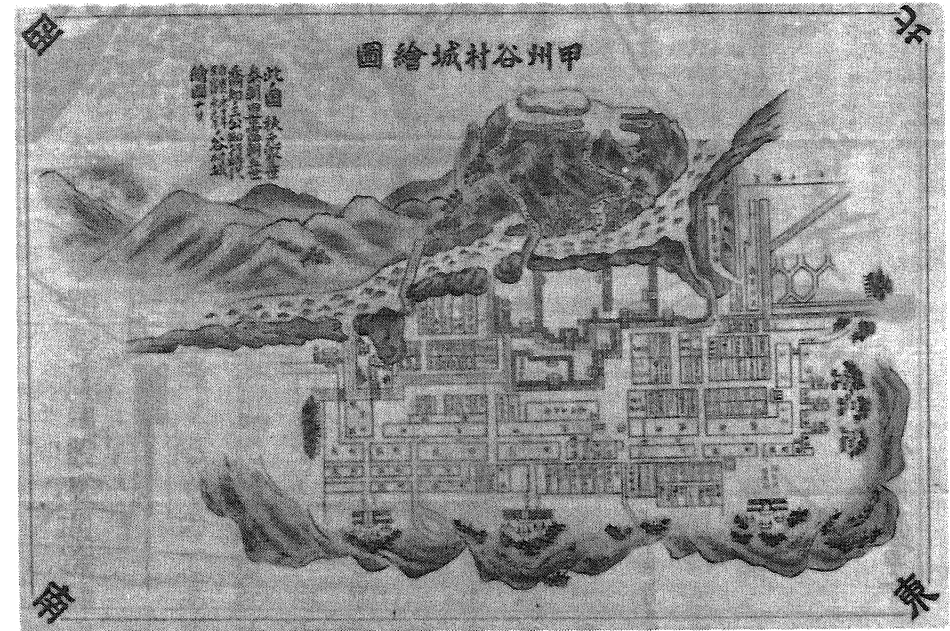


旧 取 水 口



新 取 水 口 昭和60年改修

三 代 絵 図



この絵図は秋元藩時代のもの  
であるが、家中川が城の内濠、  
外濠として利用されているこ  
とをよく表している。

## 谷村大堰の歴史

### (一)、谷村大堰の起りについて

谷村大堰は、寛永一〇年春、秋元但馬守泰朝が上州総社（群馬県）より甲州都留郡一万八千石の谷村城主として転封となり、寛永一三年（一六三三）より同一六年まで約三ヶ年の歳月をかけて完成したものである。

泰朝は総社より持参した御用金四万両余を財源として、地元領民と心を合せ、熔岩を開鑿して大堰を開いた。

大堰は桂川の水を十日市場の滝上、「ネタ入山」の麓から取入れ、堰水は間もなく二流に分かれ、一流は楽山の裾を西願寺の方向に流れて「寺川」となり、一流は田原の中央を柳田橋の方向に流れ、この間田原（上谷村）の田畑を潤す。

堰水は柳田橋付近にて更に分かれ、その本流は城下町に入って「家中川」となり、支流「中川」となって城下町の中央を流れ、ともに町民の生活用水となったほか、家中川はまた谷村城の内・外堀を満して堀用水ともなった。

城の「三ノ丸」の外堀をかねて流れる家中川は、城の鎮守「源生稻荷」を過ぎて間もなく「女川」が分流し、道生堀をへて古川渡方面に流れ、この間田畑を潤して桂川に落ちる。

さらに家中川の本流は中川を横町、寺川を弁天町付近で合流して下谷、深田、四日市場方面に流れ、この間田畑を潤して菅野川と合流している。

### (二)、大堰による農業の開発について

前記のように谷村大堰は、家中川・寺川・中川・女川となって上下谷村・深田・四日市場・道生堀・古川渡の田畑を潤し、又城下町（上・下谷村）町民の生活・防火用水として日常生活に欠くことのできない大切な川であった。

いま文禄三年（一五九四）から寛文九年（一六六九）の七五年間における大堰による田畑の増収状況を統計資料により調べてみると、左表の通り、六三九石五斗七升八合の増収となっている。

○谷村大堰による文禄より寛文年間にいたる田畑増収表

区分	検地年代		増 ⊕ 減 ⊖
	文禄三年（一五九四）	寛文九年（一六六九）	
上谷	五二八、七九〇石	六二九、二六二石	⊕ 一〇〇、四七二石
下谷	四七三、七三〇	八七〇、五八二	⊕ 三九六、八五二
四日市場	三五七、八〇〇	四〇二、五九三	⊕ 四四、七九三
古川渡	二二四、八一〇	三三二、二七一	⊕ 九七、四六一
合計	一、五八五、一三〇石	二、二二四、七〇八石	⊕ 六三九、五七八石

### (三)、大堰と水車と富農について

谷村大堰は水量が豊かで、しかも富士の裾野が尾をひく傾斜地のため流れが急で、水車による動力源の確保に最適であった。水車による動力は、穀物の精米・製粉、織機の動力に利用された。

弁天町（下谷）の町名は、水神弁財天から起っており、この付近は特に水車業者の多かったことを物語っている。

一般に農民が財をなす過程は、水車業・製粉業者から穀商となり肥料商をかね、やがて富商となる場合が多い。

天保七年（一八三六）に起った郡内農民一揆に、谷村近在一三ヶ村の農民の打ちこわしの対象となった谷村の商家のなかには、水車の経営から成長した富商が多かったことが推察できる。

### (四)、大堰と機業との関係について

郡内は伝統的機業地であるが、寛永一〇年秋元泰朝が郡内に転封の際、上州総社の例にならって、家中にも養蚕・機織を奨励し、これを「家中織」と称した。

また秋元但馬守喬知は宝永元年（一七〇四）暮、武州（埼玉県）川越に転封後は、谷村より織工を連行して仙台平に似た川越平を織らせたと伝えられており、秋元氏三代七二年間の郡内機業発屋にあたえた影響は大なるものがあったと考えられる。

大正末年頃までは、すでに述べたように、郡内織機の動力源として水車を利用する家も多く、明治三六年（一九〇三）谷村城三ノ丸に設立された七〇馬力の「谷村電燈会社」も、家中川の急流を利用して発電し地元の産業に貢献したのである。また郡内織物に欠かせられない染色作業も、この家中川の清流が利用され、現在にまでいたっている。

#### （五）、大堰は郡内各堰開発の先駆

江戸時代の初期から中期にかけての谷村大堰・五ヶ堰の完成は、江戸時代末期から明治の初めにかけて農民が主体で計画実施された桂川左岸の二ヶ堰・平栗厚原堰・川棚堰などの開鑿に大きな影響をあたえたのである。

武士に武士魂があるように、農民には農民魂がある。

農民の最大の願いは米をつくることであった。桂川右岸には大堰・五ヶ堰によって毎年黄金の稲が波うつつを見るにつけ、たびかさなる飢饉に対処するためにも左岸に住む農民の堰の開鑿は年来の悲願であったのである。指導者の多大な犠牲によって、これらの堰は後に若干の問題を残しながらも遂に完成した。

#### （六）、おわりに

今から三五六年前、領主秋元泰朝と祖先が心を合わせ、谷村城下町づくりの一環として汗水流して完成した谷村大堰は、今日まで桂川の流れとともに絶えることなく、都留市谷村を貫流する動脈として、住民の心のなかに連々として感謝の気持が脈うってきた。

終戦後、時代の激しく変転移行するなかで、多くの田畑は住宅・工場に転用され、かつて生活用水として重要視された大堰の水路も、今は汚物を投棄する廃水路と化してしまっている。

今こそ都留市民は、祖先が後世に「ふる里づくり」として残した偉業に感謝し、大堰（家中川・寺川・中川・女川）を魚住み鳥

が浮ぶ「水の都」にふさわしい昔の清流の姿に戻して子孫に伝えることこそ、現在に生きる都留市民の任務であることを痛感する。住民の心清らかならば、ふる里の川の流れも自づから澄み、隣人の心和やかならばふる里は明日に向かって明るく伸び続けることであろう。